

# 青い鳥の哀歌

— 澁澤龍彦『画美人』論 —

リン シュクタン  
林 淑丹

## はじめに

澁澤龍彦（1928-1987）の『画美人』は、『文芸』（1983年5月号）に発表され、のちに『ねむり姫』（河出書房新社、1983.11）に収められた。『画美人』は、明治期の怪異小説集『夜窓鬼談』（石川鴻斎、東陽堂、1889-1894）の「画美人」に取材した作品である。主人公の七郎の愛蔵している美人図に描かれた美人が、ある日、絵の中から現れて本物の人間のようにになり、七郎と情交する。しかし、美人の正体は鳥の化身であり、七郎にそのことが露見すると姿が消えてしまったという話である。

澁澤龍彦の『画美人』は、原典と異なり、幻想的かつ妖艶な情欲の世界に仕上げられている。筋の展開や登場人物の設定などにおいて、澁澤龍彦は原典をどのように参照し、それらを変形したのか。また、他に参照された可能性のあるテキストも考察の範囲に含まれる。というのは、澁澤龍彦『画美人』における間テキスト性の問題を検討するためである。一方、鳥と人間の交合は異類婚姻譚の典型を表現してもいる。ただし、登場人物の女は通常、正体を見破られると元の姿（鶴や蛇、魚など）に戻って行方をくらますのに対し、『画美人』の場合、女は鳥の姿に戻るのではなく、画幅の中に吸い込まれたのちに姿を消したのだという。「翠翠」という名前が表しているように、彼女は幸せの青い鳥のように遠方から飛んできたが、物語は悲劇的に終わってしまう。

ここでは、『画美人』の題材や、作品における異類婚姻譚の変形について検討することによって、澁澤龍彦の物語に独自の世界を探ってみたい。

## 一. 『夜窓鬼談』からの取材

『画美人』を収録した単行本の『ねむり姫』の末尾に、澁澤龍彦は「付記」の形で、『画美人』に引用した漢詩は石川鴻斎著『夜窓鬼談』から借りたものだと説明している。『夜窓鬼談』（上下巻）は、石川鴻斎（1833-1918）が漢文で撰した怪異小説集で、計八十六編ある。明治期に成立した漢文体の奇談・怪談集の代表として、当時の文壇で知られていた<sup>①</sup>。澁澤龍彦は具体的に『夜窓鬼談』の短編名に言及していないが、内容から「画美人」（『夜窓鬼談』上巻第十七編）を指していることは明白である。

しかし、実際、澁澤龍彦が『夜窓鬼談』「画美人」から借りたのは、作品の漢詩だけではない。作品の大まかな筋道は、「画美人」を下敷きにしている。主人公貴船七郎が生々しい美人図に愛恋の詩を創作したその夜、七郎の情念に感応した美人が絵から離れて七郎と情交する、という主な展開は、原拠「画美人」を借用したものである。

松山俊太郎氏は、『澁澤龍彦全集』「解題」で、澁澤龍彦『画美人』とその原典「画美人」の筋道の相違について分析し、主人公七郎の金魚飼いや、松浦芳斎という人物の出現などが澁澤の創出だと説明している<sup>②</sup>。また、美人の名前「小麗」を「翠翠」と改名したことから、美人の正体は翡翠（かわせみ）か青い鳥だという。しかし、澁澤版の『画美人』は原拠の大まかな筋道を踏まえていながら、七郎が美人と出会う前の展開や、物語の結末などは、明らかに他の作品を参照したものである。

松山氏は、澁澤が『夜窓鬼談』から借用したのは「画美人」のみだと考えている。しかし、高柴慎治氏も指摘しているように、「画美人」の他、「果心居士——黄昏艸」（『夜窓鬼談』下巻第五編）及び「一目寺」（上巻三三編）をも組み込んだ趣向になっているという<sup>③</sup>。澁澤は『夜窓鬼談』八十六編の短編から少なくともこれら三編の作品を下敷きにしていると考えられる。

まず、「果心居士——黄昏艸」に着目して検討すれば、澁澤『画美人』の前半における美人図のやり取りや、絵にまつわるエピソードは、明らかに「果心

居士——黄昏艸」を撰取していることが分かる。「果心居士——黄昏艸」では、戦国時代の武将織田信長が、果心居士の地獄絵を不正な手段で手に入れたため、その絵を開くと、真っ白で何も描いていなかったり、五十両の金を出して買くと、五十両の価値に相当する映りあいになったりしているように描かれている。澁澤『画美人』では、七郎が美人図を手にする経緯の細部まで「果心居士——黄昏艸」を踏襲していると言えるであろう。

『画美人』では、父親の友人である松浦芳斎が唐様の美人図を七郎に見せると、絵の美人が「精気みなぎる生身の女人」（『澁澤龍彦全集』「第十九巻」（河出書房新社、1994年12月、P319-343、以下同）のようだったので、七郎はその絵を所有したくなる。芳斎は五十両の値段で七郎に売った後、七郎は下男に命じて芳斎から代金を奪い取るが、すると、その絵は白紙となっていた。七郎が再度代金を支払うと、美人図は前より浅ましく精彩に欠け、五十両の値段に応じた色の映りあいで復元されていた。こうした展開は、果心居士と信長との地獄絵にまつわるエピソードの展開とほぼ同様である。信長が居士の生々しい地獄絵を欲する。果心居士は百両を求めたが、拒否された。臣下の荒川氏は居士から絵を奪い取ったが、その絵は真っ白で何も描かれていなかった。信長が百両を支払って初めて、絵は百両の映りあいになったという。奪い取ってきた絵を「そわそわしながら」広げる様子や「悪の道に未熟」な道楽息子の七郎の形象などは、荒川氏の陰険なイメージと異なるが、『画美人』の前半に描かれている七郎の美人図と出会う経緯は、明らかに「果心居士——黄昏艸」を借用したのであると考えられる。

また、澁澤『画美人』の後日談の部分は明らかに『夜窓鬼談』「一目寺」を下敷きにしている。『画美人』の後日談は次のように展開される。画美人に臍がないことに困惑した七郎は、美人の消えた後、ある日遊里を出てから山に向かう。途中、一つの寺に入ったが、その寺にあるすべての仏像が意外にも臍を出している。七郎が喜捨金を置いたら、諸仏に大笑いされた。七郎が寺の前にある駕籠に乗ると、結局、十年前に住んでいた青山の別業に着いてしまう。こ

うした筋の展開は、ほぼそのまま『夜窓鬼談』「一目寺」を借りている。ただ、「一目寺」の仏像に一つの目しかない箇所を、澁澤は仏像が臍を出しているように改めたのみである。

このように、澁澤は『夜窓鬼談』より、少なくとも三つの短編から材を取っていることが分かる。『画美人』の骨組みは『夜窓鬼談』「画美人」を受け継いだが、主人公の美人図を入手するまでに関するエピソードは、「果心居士——黄昏艸」より取り込んでいるものである。また、主人公の後日談の筋道も、細部まで「一目寺」を借用している。

澁澤龍彦の蔵書目録に『夜窓鬼談』が見られる<sup>④</sup>。それは、明治二十七年(1894)年の版である。澁澤の蔵書は豊富で、様々な領域、ジャンルによって分類し整理されている。しかし、漢文体の奇談・怪談集『夜窓鬼談』が「日本史」の類に分けられていることは、やや奇妙に思われる。また松山俊太郎氏のように、澁澤の所蔵した『夜窓鬼談』ではなく、国会図書館に所蔵されている『夜窓鬼談』を典拠としてしまうのは問題があろう。澁澤文学は漢文学とは一見かけ離れたもののように見える。しかし、『画美人』のように、漢文体で書かれている明治期の怪奇小説に着目したことから考えれば、西洋文学、特にフランス文学のみならず、漢文学の創作意匠をじっくり吟味し、自らの創作技法の視野に入れていることが認められるのではないだろうか。

## 二. 画美人のセクシュアリティ

澁澤版『画美人』が原典『夜窓鬼談』「画美人」と一番大きく異なるところは、美人の形象だと言えよう。澁澤の作品では、原典に見られない美人のセクシュアリティが多様に表現されている。原典では画中美人が絵から抜け出しからの容態について一切触れられていない。しかし、澁澤版『画美人』では、まず美人は「緋牡丹のよう」な「上気した顔で」、「うっすらと匂いのよい汗をかいている」と、美人の品の良さが強調される。「しかも、唐様の軽羅の下で、そのからだは熱く燃えていた」と美人の体温を描くことでその情欲を暗示する。

そして、七郎は美人を抱いて、「掌中にした珠があまりみずみずしく、あまりきらきらしく、その内部から滾々とあふれ出るような妙味にしたたか酔わされていた」(P335)とある。七郎が美人と情交した際には、部屋中に濃厚な芳香が満ちていった。匂いの源泉は美人の濡れた汗であり、しかも庭前の桃李とは「明らかに違った、もっと高雅な匂い」であったという。美人の濡れた汗の匂いを「高雅な匂い」と表現するのは、匂いを借りて美人のセクシュアリティを表現しているだけでなく、その女体を称えているのである。

要するに、美人の容貌から、高雅な匂い、燃えるような体温、内部から湧き出てくる妙味に着目して、現実には存在しそうな画美人の身体を描いているのである。しかも、画美人の身体を描写する際に、「女」と呼ぶ。画中から現れた美人は、香り・匂い・味覚・温度を通して独特のセクシュアリティを演出しているのである。

さらに、七郎は美人の汗が部屋の匂いの源泉だということが分かってから、「伽羅のほとけに箔を置くという話は聞いたことがあるが、伽羅の女とはめずらしい。特異体質だな」と言う。物語の前半では、美人が「伽羅のほとけ」と同じ次元で語られるように神格化されている。「特異体質」をもっている美人はより神秘的に作り上げられているのである。このように、物語の前半では、画美人は上品で「高雅な匂い」を発する情熱的な女、まして「ほとけ」に神格化されるほどの「特異」な女として仕立て上げられている。

### 三. 異類婚姻譚の変形

#### (1) 日本の昔話の類話

他方、『画美人』における鳥と人間の交合は、異類婚姻譚の典型を表現している。鳥が女に化けて男と恋に落ちたりする展開は、雀の恩返し、鶯の里、鶴女房などの昔話に見られる。ただし、昔話「鶴の恩返し」などとは異なり、他界の女が男の元を突然訪れ、家を富ましてから去ってしまうといったパターンには当てはまらない。また、七郎と画美人は夫婦というわけではない。

しかし、画美人は昔話の異類の女と同様、最初本性を隠していたが、正体が露見すると消え去っていくようになっている。河合隼雄氏が「浦島太郎」を例にして昔話の女性像を次のように分析している。「浦島太郎」の亀姫はもともと亀に化して海中に住み、「猥褻にも秋波を湛へて漁夫の歡心を哀求するが如き」という肉体的な面が強調される女性であった<sup>⑤</sup>。しかし、時代と共に亀姫像が変遷して「かぐや姫」、「羽衣伝説」、「天人女房」のように、清浄高潔な仙女のように永遠の乙女像に変わっていた。女性の肉体性が切り離されることによって仙人になっている。亀姫は仙女像と娼婦像の二つの像に分離したのである。

澁澤の画美人は、「浦島太郎」の亀姫のように自らプロポーズをするわけではないが、積極的に自分の肉体を捧げようとした姿勢は同じである。七郎は相手の素性が分からないまま、美人の誘いを承知する。画美人は肉体的な面が強調される娼婦的な形象をもちながら、特異性、神聖性をもつ伽羅の女になぞらえられてもいる。ただ亀姫像と異なるのは、画美人が神聖性と肉体性を持ち合わせることである。

## (2) 消え去る女と残された男

さらに、昔話の女は通常、正体を見破られると元の姿（鶴や蛇、魚など）に戻って行方をくらますのに対し、『画美人』の場合、美人は鳥の性質をもったままで画幅の中に吸い込まれたのちに姿を消す。美人の正体が七郎に見られると、七郎と付き合えなくなった。見られることは彼女にとって最大の悲劇で、「鶴女房」のように禁止を破られた女は、それに対して怒るのではなく、自ら身を引いてしまう。罰は画美人のほうにある。「翠翠」という名前が表しているように、彼女は幸せの青い鳥のように遠方から飛んできたが、物語は悲劇的に終わってしまう。また、アンデルセンの人魚姫が王子に会うために人間の姿に化けたが、かけられた魔法が消えて泡になってしまうように、美人も、元々紙の上にある命のないモノだったのに、七郎のために甦り、また滅ぼされてしま

う。原典『夜窓鬼談』「画美人」の幸福な結末とは異なり、幻想的で破滅的でさえあるその終わり方は、澁澤の怪異を表現する創作法の一つだと考えられる。

七郎のタブーを犯した罰は、美人を失うだけではない。残された七郎は、ますます酒色耽溺の生活を送るようになった。美人に出会った青山の別業に住んでいた時、「詩を賦したり蕭を吹いたり」、「書画文房の具を弄したり」していたが、美人の消失と共にそうした教養的な趣味も消去されて、放蕩無頼の道楽生活を送った。しかし、果たして画美人は実在していたか。美人が最後に姿を消した時も、「七郎が茫然として見ている」だけであった。後日談で、七郎が臍のない仏像や僧侶に出会った奇怪な遍歴をしてから、最終的に青山の別業に戻ったことは、画美人との出会いと重ねられて考えられている。即ち、画美人との出会いはあくまでも滑稽な夢のようだったのではないのだろうか。

### 終わりに

澁澤龍彦『画美人』の取材源は、『夜窓鬼談』「画美人」からだけでない。「果心居士——黄昏艸」と「一目寺」の筋をも摂取していることが分かる。澁澤には漢文体で書かれた明治期の怪奇小説への関心がうかがわれる。また、鳥と人間の交合は異類婚姻譚の典型を表現してもいる。澁澤は美人の正体を鳥の化身という設定に変えたうえで、物語の結末で姿を消してしまわせるような悲劇的な脚色を加えている。原典『夜窓鬼談』「画美人」の幸福な結末とは異なり、幻想的で破滅的でさえあるその終わり方は、澁澤の怪異を表現する創作法の一つだと考えられる。

#### 【注】

- ①『夜窓鬼談』に内包されるさまざまな特性などについては、拙稿「石川鴻斎『夜窓鬼談』『東斎譜』試論」（文藻外語学院日本語文系『2009年「日語教育之應用與發展」國際學術論文集』2010年3月、P125-P140）を参照。
- ②松山俊太郎『澁澤龍彦全集』「第十九卷 解題」（河出書房新社、1994年12月、P447-P453）
- ③高柴慎治「『夜窓鬼談』の世界」（静岡県立大学国際関係学部日本文化コース編『テキストとしての日本：「外」と「内」の物語』、2001年3月、P7-P34）

- ④国書刊行会編集部『書物の宇宙誌 澁澤龍彦蔵書目録』（国書刊行会、2006年10月）  
⑤河合隼雄『昔話と日本人の心』（岩波書店、2011年5月、P176）

## 参考文献

〈単行本〉

- 石川鴻斎『夜窓鬼談』上下巻（東陽堂、1893-1894年、東京大学東洋文化研究所蔵）  
『澁澤龍彦全集』「第十九巻」（河出書房新社、1994年12月）  
小松和彦『異界と日本人』（角川書店、2003年9月）  
小澤俊夫『昔話のコスモロジー』（講談社、2005年1月）  
国書刊行会編集部『書物の宇宙誌 澁澤龍彦蔵書目録』（国書刊行会、2006年10月）  
河合隼雄『昔話と日本人の心』（岩波書店、2011年5月、P176）

〈雑誌論文〉

- 高柴慎治『「夜窓鬼談」の世界』（静岡県立大学国際関係学部日本文化コース編『テキストとしての日本：「外」と「内」の物語』、2001年3月、P7-P34）  
林淑丹「石川鴻斎『夜窓鬼談』『東斎譜』試論」（文藻外語学院日本語文系『2009年「日語教育之應用與發展」國際學術論文集』2010年3月、P125-P140）

## \* 討議要旨

谷川惠一氏より、鳥の化身であることに関する本文内容の確認があり、発表者は、原典には記述がなく澁澤作品では自分は化生の者が臍がないと美人が告白し、その後、迦陵頻伽（かりょうびんが）。迦陵頻伽とも。人頭、鳥身の、仏教で雪山あるいは極楽にいとされる想像上の生物）という生き物があることを松浦芳齋が七郎に教える場面が描かれている旨、説明した。これをふまえ、谷川氏より、迦陵頻伽は鳥のような実在の生き物ではなく、異類婚姻譚に結びつけるには、それらの場面検討を含めた詳細な手続きが必要なのではないかとの助言があった。次に林晃平氏より、「浦島太郎」の亀姫像については諸本の検討が必要であり、御伽草子の諸本からは肉体的な面が強調される女性像が読み取れないのに、河合隼雄氏の説に基づき論を展開している点が危惧されるとの指摘があった。更に林氏は、亀姫の系統に位置していた乙姫が、御伽草子以降、亀と分離するようになり別のキャラクターを持つようになる点をどう考えるか質問した。発表者は、今回は河合氏の説に依拠したが、典拠に関して今後理解を深めたいと応答した。最後に、司会・戸松泉氏より、近代小説としては、芳齋が七郎に切りつけられる場面についての分析に興味を持たれるところであり、澁澤作品の独自性についても、もう少し検討すると良いのではないかと示唆があった。